報告課題⑦　第２回テストに向けて（復習プリント）

●表面

空をかついで…この表現そのものが「比喩」であることに注意。実際に空をかつぐことなど、不可能であるのに、とてつもなく大きなものを世代を超えて継承していくことのたとえ。

一、この答えを境として、前半がきのうからきょう、後半がきょうからあした、と続いていく時間が変わっている。

生物がいるとされる一番遠い距離　　ここに点「、」があることに注意。

二十億光年の孤独…**誤字に注意！**　**孤**

二、「ネリリし、キルルし、ハララ**している**」とあることから、それぞれのカタカナ語は「動詞」であることに注意すること。

第一連…人類は**小さな球**（地球を例えている。直径１万２７００㎞）の上で

第二連…火星人は**小さな球**（火星を例えている。直径６０００㎞）の上で

「連」とは、詩歌における、内容の小さなまとまり。普通、一つのまとまりあと、一行空きの改行が見られる。（問い　この詩は何連？）

※この表現から、作者は宇宙からそれぞれ二つの惑星を上から見下ろし、小さく見えるほど遠いところにいる感覚で書かれていることがわかる。

※宇宙の端から端までは137億光年と言われている。

第二連　しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする

それはまったくたしかなことだ

※第一連で地球の人類も孤独を感じているのだから、火星人も同じように感じて当然だという確信で書かれている表現に見受けられる。

第三連　万有引力（ばんゆういんりょく）…ニュートンの発見として有名。「万」は漢文で学んだ「百獣」のときの「百」と同じで、「すべての」という意味。（すべてのものが保有する引力という力、という意味。）

第五連　宇宙はどんどん**膨**（ふくら）んでゆく　**誤字に注意！**　画数が多いのでしっかり確認を。

※普通、送り仮名は「膨らんで」なので注意する。

※光速は一秒で地球を一周半する。（時速では30万㎞）

第六連　くしゃみ…宇宙空間（真空）では音が出ても伝わらない。宇宙の広大さとの対比でちっぽけな音を表現した。

作者…谷川俊太郎。小学生時代（二年生）に「スイミー」（ちいさなかしこいさかなのはなし）という、魚が主人公のアメリカの絵本（レオ・レオニ作）を学んだはずだが、この話を翻訳したのは谷川氏である。

※**鑑賞**とは…鑑賞文は作者がその文章（もしくは詩、俳句）を書いたときにどういう思いで書いたかや、その文にどんな背景があるか、何を言いたいか（表現しているか）、などを述べる文である。感想文とは異なる。学習書Ｐ52の「理解を深めるために」が「参考書としての鑑賞文」にあたるが、自分で作品の背景や、当時の作者の思いを想像しながら書いてみること。

●裏面

冬が来た

三、口語動詞の命令形　五段動詞（ｅ）、下一段動詞（ｅよ、ｅろ）、カ変動詞（こい）、上一段動詞（ｉよ、ｉろ）、

サ変動詞（しろ、せよ）

四、助詞の「も」…他のことがらと同様にこのことがらが成立する（並立・付加）を表す。

七、作者、高村光太郎の経歴に関する文章が課題となっているが、テストの時には、石垣りんや谷川俊太郎の経歴や、教科書に本文が載っていない（書名のみ）作品についても問われる可能性があるので、教科書P74や学習書「理解を深めるために」も併せて読んでおくこと。

～詩歌に多用される表現技法～（例文）

体言止め…子どもがあこがれる野球選手。

倒置法…火事だ！　山の向こうが。

省略法…赤い色が大好きだ。しかし、青い色はちょっと…。

繰り返し（反復法）…働けど、働けど、わが暮らし　楽にならざり

直喩…まるで羊のような雲が浮かんでいる。

隠喩…雲一つないある朝、空から死が降ってきた。

擬人法…火山を始めとして、自然物のすべてが怒り狂っている。

対句法…壁に耳あり、障子に目あり。

道程全文参考　現在の人権感覚では不適切とされる言葉もあるが、製作当時の雰囲気を伝えるためにそのままにしてある。

※斜線／は改行を示す。

どこかに通じている大道を／僕は歩いているのじゃない／僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る／道は僕のふみしだいて来た足あとだ／だから／道の最端にいつでも僕は立っている／何という曲がりくねり／迷い　まよった道だろう／自堕落に消え　滅びかけたあの道／絶望に閉じ込められたあの道／幼い苦悩に　もみつぶされたあの道／ふり返ってみると／自分の道は　戦慄に値する／支離滅裂な／また　むざんなこの光景を見て／誰がこれを／生命の道と信ずるだろう／それだのに／やっぱり　これが生命に導く道だった／そして僕は　ここまで来てしまった／このさんたんたる自分の道を見て／僕は　自然の広大ないつくしみに涙を流すのだ／あのやくざに見えた道の中から／生命の意味を　はっきりと／見せてくれたのは自然だ／僕をひき廻しては　目をはじき／もう此処と思うところで／さめよ、さめよと叫んだのは自然だ／これこそ厳格な父の愛だ／子供になり切ったありがたさを／僕はしみじみと思った／どんな時にも　自然の手を離さなかった僕は／とうとう自分をつかまえたのだ／丁度そのとき　事態は一変した／にわかに眼前にあるものは　光を放射し／空も地面も　沸く様に動き出した／そのまに／自然は微笑をのこして　僕の手から／永遠の地平線へ姿をかくした／そしてその気魄が　宇宙に充ちみちた／驚いている僕の魂は／いきなり「歩け」という声につらぬかれた／僕は　武者ぶるいをした／僕は　子供の使命を全身に感じた／子供の使命！／僕の肩は重くなった／そして　僕はもう　たよる手が無くなった／無意識に　たよっていた手が無くなった／ただ　この宇宙に充ちている父を信じて／自分の全身をなげうつのだ／僕は　はじめ一歩も歩けない事を経験した／かなり長い間／冷たい油の汗を流しながら／一つところに立ちつくして居た／僕は　心を集めて父の胸にふれた／すると／僕の足は　ひとりでに／動き出した／思議に僕は　ある自憑の境を得た／僕は　どう行こうとも思わない／どの道をとろうとも思わない／僕の前には広漠とした／岩畳な一面の風景がひろがっている／その間に花が咲き　水が流れている／石があり　絶壁がある／それがみないきいきとしている／僕はただ　あの不思議な自憑の／督促のままに歩いてゆく／しかし　四方は気味の悪いほど静かだ／恐ろしい世界の果てへ　行ってしまうのか／と思うときもある／寂しさは　つんぼのように苦しいものだ／僕は　その時また父にいのる／父はその風景の間に　わずかながら勇ましく／同じ方へ歩いてゆく人間を　僕に見せてくれる／同属を喜ぶ人間の性に　僕はふるえ立つ／声をあげて祝福を伝える／そして　あの永遠の地平線を前にして／胸のすくほど深い呼吸をするのだ／僕の眼が開けるに従って／四方の風景は　その部分を明らかに僕に示す／生育のいい草の陰に　小さい人間の／うじゃうじゃ　はいまわって居るのもみえる／彼等も僕も／大きな人類というものの一部分だ／しかし人類は　無駄なものを棄て／腐らしても惜しまない／人間は　鮭の卵だ／千萬人の中で百人も残れば／人類は永遠に絶えやしない／棄て腐らすのを見越して／自然は人類のため　人間を沢山つくるのだ／腐るものは腐れ／自然に背いたものは　みな腐る／僕はいまのところ　彼等にかまっていられない／もっと　この風景に養われ／育まれて／自分を自分らしく　伸ばさねばならぬ／子供は　父のいつくしみに報いた気を／燃やしているのだ／ああ／人類の道程は遠い／そしてその大道はない／自然の子供等が　全身の力で拓いて／行かねばならないのだ／歩け、歩け／どんなものが出てきても　乗り越して歩け／この光り輝やく風景の中に　踏み込んでゆけ／僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る／ああ、父よ／僕を一人立ちさせた父よ／僕から目を離さないで守る事をせよ／常に父の気魄を僕に充たせよ／この遠い道程のため／